



農業に対する新しい認識と 私達の立場について

チッソ旭肥料株式会社 取締役副社長 本田 静一

本年は、農業界にとっても、肥料業界にとっても、好い年であって欲しいと切望致します。わたくし達の発行する小冊子が、「農業と科学」と改題されてから、満2年が経過致しました。ご愛読下さる皆様方に、衷心より感謝の意を表します。今後とも引続き、お役に立つような記事を掲載するように、努力致したいと思います。

さて一般に、食糧として用いられ、また工業材料として用いられる物を、陸生の動植物を育成することによって提供するものが農業ではありませんが、これはまた、観点をえますと、人間を取巻く、生態系の一部を担っている重要な仕事をしているものと、評価することができます。

植物は太陽エネルギーを利用して、空中の炭酸ガスから、有機物を合成していることは、既に明かなことでありますが、ある研究者の計算によりますと、おおよそ、地球にふり注ぐ太陽エネルギーの1000分の1を植物が利用しているとのことで、しかも、その内訳を見ると、おおよそ次の表のようになっているとのことです。

全部で、 33.2×10^9 、すなわち332億トンと計算しています。学者によっては、海域の方が、陸よりも多いのではないとも言っています。

地域	面積 km ²	固定炭素 トン/km ²	固定炭素量 トン/年
① 森	44×10^6	250	11×10^9
② 耕地	27×10^6	149	4.3×10^9
③ 草地	31×10^6	43	1.1×10^9
④ 砂漠	47×10^6	7	0.2×10^9
①~④ 全陸地	149×10^6		16.6×10^9
⑤ 全海域	361×10^6	46	16.6×10^9

いずれにしても、この表で、私は、耕地の占める割合を示したかったのであります。農業が、いま果しつつある環境浄化の程度を、認識したいと考えたからであります。

植物は大気中から、炭素を固定しているのみならず、酸素を供給し、われわれが地中に廃棄した物から、微生物が造り出す窒素や炭素の化合物を再吸収して、その成果を、われわれに与えてくれる、重要不可欠な存在であります。農業を介して、われわれは、植物との良好な関係を維持発展させることができているわけであります。

農業を以上申述べたような考で認識し、評価しなければならないと思います。農業の健全な発展を計り、農業を常に、われわれの生活圏に維持するようには、人間にとって大切であり、従って社会にとっても大切なことと云うべきでしょう。

食糧や材料を提供する産業としてのみでなく、大気汚染を改善し、大地の劣化を防いで、人類生存のための、生態系維持のための、必要不可欠の企業として、農業が認識され、取扱われる時代が来るのではないのでしょうか。

肥料を生産し供給する私達としても、このような認識のもとで、更に努力して、農業に奉仕しなければならないと考えております。